
学園レイ

阿万之

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

学園レイ

【Nコード】

N5009Y

【作者名】

阿万之

【あらすじ】

佐藤茂は転校先の学校で怪奇な事件に遭遇する。茂は新しくできた仲間と屋上限定の女幽霊と共に奇怪な事件に挑む……！

？

学園に霊の話が出てきたのは、佐藤茂が転校してきて直後のことだった。当時彼は新しい学び舎に慣れていなく、友人も少なかった。隣にいた橘奈央が唯一の話相手だった。その彼女がだんだんと邪険になってきたとき、そんな噂を耳にしたのだ。それは茂が腹痛に襲われてトイレの個室に駆け込んだときだった。風邪気味だったからか、軟化した便が勢いよく出てきた。尻を拭いて便を流す。すつきりした。学校のトイレで大便をするという行為は嫌なものだが、この狭い個室はなんとなく落ち着く。前の学校とは違い、ここは洋式で、落ち着いた空間になっている。それでもどこか汚いイメージのある場所に用を終えてから長居はしたくない。ズボンを上げ、出ようかと思ったら誰かが入ってきた。二人組みのようだ。小用を足しにきたのだ。尿を便器に流しながら喋りあっている。たわいのないことを話している。茂は出るに出られない。知った顔ではないかもしれないが、大便をしたということをばれたくない。

「知ってるか？ 最近、校舎に女の霊が出るらしい」

茂の耳が反応した。

「ああ？ 何だよそれ」

「だから霊だよ霊。女の霊が出るんだって。結構見たやついるんだよ。うちのクラスのやつだって見たっていつてるし」

「くだらねえ。俺、霊なんて信じないよ」

「どうでもいいけどね、お前如きが信じる信じないは」

二人組はトイレを去った。残った茂は少し間を空けて個室から出、外廊下に出た。今の二人の会話を思い出す。馬鹿らしい、と思うが、なんとなく気になった。霊というものがあるとしたら、見てみたいもだと前々から思っていた。学校の霊か。どうせ何かを見間違えて、話に尾ひれがついたんだろう。結局すべての事柄に説明はつくものなのだ。

クラスに戻ると佐藤蓮華^{れんげ}が話しかけてきた。蓮華という変わった
というか、妙な名前を持つ彼は茂の新しい学び舎の、数少ない話相
手の一人だ。橘奈央とは反りが合わないようで、彼女と茂が話して
いるときはこちらには近づくかない。名前こそ変わっているが、ごく
ごくありふれた平凡な生徒だ。顔も、体つきも。性格も地味で、ゲ
ームが趣味。

「どこいつてたんだ？」

「ちよつと催して。トイレだよ」

蓮華はにやりとした。

「何？」

「いや茂は度胸あるな。一人でトイレなんて。俺ちよつと怖いよ」

「何が怖いって？ たかがトイレにいくくらい」

こいつは小学生かと茂は呆れた。

「最近の噂知らないわけじゃないだろ？ 霊だよ」

なるほど合点がいった。しかしそれにしても……情けない。

「幽霊なんていないよ」

蓮華の顔は深く、暗かった。

「わからないよ」

それだけいうと、蓮華は茂から離れていった。茂のよく知らない
仲間たちの輪に合流する。

茂はどこか変な蓮華の行動を考え、そして霊のことを考えた。ち
らりと横を見る。橘奈央は澄ました顔で携帯電話をいじっている。
じつとみていると目があった。

「何よ？」

奈央の顔は窓から射す光によって輝いて見えた。茂はふと思った。
奈央のことが好きなのかもしれない。奈央は……可愛いかもしれな
い。白さの中に赤みがかかる淡い白色の肌は美しかった。

「幽霊って信じる？」

「馬鹿じゃないの」奈央は再び携帯をいじりだした。

女子ではこんなのか話す相手がいないのだ。まったくもって切ない青春だ。せつかくの高校生活だというのに、彼女どころか友達すらまともにできずに終わるのだろうか。憂鬱な気分になる。幽霊よりも、辛い現実のほうが怖い。

「でもみんな噂してるじゃん」再び奈央に話しかける。

「茂君は噂話をいちいち本気にするの？」

「そうじゃないけどさあ、でもほら、火のないところに……」

「そういうのきもいからやめて」

茂の言葉は途中で遮られた。

「何が？」

「ことわざみたいなの。うざい」

茂は面食らった。この程度でうざい呼ばわりだ。

「慣用句くらい使ってもいいじゃんよ」

「気持ち悪いの。お願いだから死んで」

死ぬかよと茂は心の中で思った。奈央はまた携帯をいじりだした。どうやら自分は奈央に受け入れられてないらしい。生理的に受け付けない、というやつだろうか。友達もいない。隣の席の娘は冷たい。いいところなしだ。

？

学校が終わると自転車で家まで帰る。家からはさほど離れていない。今日も退屈な日だった。明日もそうに違いない。家に帰りゲームをしながら、隣の席の女子に好かれる方法を考えた。やはり、一人で孤独でいるのが薄気味悪く思えるのだろうか。

だけど死んでは酷くね？

結局もやもやした気分のまま夜を明かした。

次の日、憂鬱な学校を休もうかと思ったが犬が元気なのでつい登校した。飼っているマサヒトはなかなか愛嬌のある雑種で、愛くるしいその姿を見ていると気分がよくなった。自分でも単純だと思いつながら自転車をこぎ、そしてクラスにきてまわりが騒いでいるのを見ると途端に憂鬱になった。お前ら何がそんなに楽しくて生きてるんだ？ 席に座る。隣には奈央の姿はない。どこかで女子たちの輪に入っているんだろう。

不気味なほど退屈な時間はホームルームが始まるまで続いた。今日は蓮華もこなかった。

蓮華とは話す相手ではあるが、プライベートで遊んだことは一度もない。

昔の友人に頼ろうかと茂は考える。が、別の県に転校をした彼に頼れる者はいない。小学校、中学校の仲間とは疎遠だった。

ため息しかでない。死ぬほど退屈で孤独だ。

昼休みがくる。なんとなく、屋上で食べてみたくなった。なので弁当を持って屋上へ。屋上の階段を上がる途中、不良とすれ違った。名前は知らないが、同じ学年のやつだ。金髪で目つきが異様に悪い。まるでこの世の全てを否定しているような、悪鬼のような目だ。背も高く体もしっかりしている。喧嘩したらまず勝てないだろう。風を切るように階段を下りてくる。

「よお」

「やあ」

とつさのことだった。その不良学生に挨拶されたようなのでそう返した。驚いて振り返ると、その生徒は振り返ることなく悠々と階段を下りていった。

大した意味はないんだろう。一人だけでいるやつに挨拶しただけだ。けど…… けどどこか新鮮で、嬉しい気持ちがあった。屋上にきてみるもんだなと思ったりもした。

そして次の日も屋上へ。日は照っているが、風が強く吹いていて逆に気持ちよかった。町を見下ろしながら弁当を平らげる。悪くない。教室よりにいるよりもずっと気分が落ち着く。

「やつほう」

誰かに声をかけられた。振り向くとそこには女性徒がいた。黒々とした黒髪を三つ編みにした少女が一人、にこやかな笑みを浮かべて立っている。

一度にいろいろなことを思った。

この女、ここで何をしているんだろう？

結構可愛い子だな。睫がずいぶん長い。鼻は高いな。

女子にしては背高いな。俺と同じくらいか。

いい太ももだな。パンツ見えないかな。

「どうも」控えめな挨拶を返す。

「こんなところで何してんの？」

女が何者なのかわからない。クラスの女子全てを把握しているわけではないが、こんな女子はいなかったはずだ。そこそこ、いやかなり可愛いし、すぐに気づくはずなのだが。

「外の風に当たりたくて」

「ふうん。でもちよつと風強すぎると思うよ」

「えっと、よかったら名前書いてもいいですか？」

相手が年上とも限らないから敬語で尋ねる。

「私？ かわぞえかある 河添薫だよ。知らない？」

知らない。誰だよ。

「薰ね、ずっとこの屋上にいるんだけどね。昨日も君いたよね？
ちよっと一人でさびしそうに見えたよ」

「昨日いた？ 昨日は不良とすれ違ったけど、屋上には誰もいなかったはずだ。」

「昨日は俺一人だと思ったんだけど」

「いたんだよ。姿隠してたからわかんなかったよね。結構臆病だから、私」

ふうんと茂は思う。姿を隠すっていうのがなんとなく滑稽で笑えたが、顔には出さなかった。

「君は何年生なの？」

「二年生です。あ、俺、佐藤茂っていいいます。薰さんは三年生ですか？」

これで一学年だったらなんだか恥ずかしいなと茂は思う。

「あたしは三年生だよ。もっとも、それはあんまり意味のないことだけだね！」

「どういうことだろう。学年よりも経験がとかそういうつまらない意味だろうか。」

「薰さんもここで食事を？」

「食事っていうか、ここがあたしの全てだから」

「よっぽど屋上が好きなんだろうと茂は解釈した。しかしこの人はなんでこっちに話かけてきたんだろう。嬉しさの反面、戸惑いも感じる。」

「昨日は不良君もここに遊びにきてくれたんだよ。章吾って名前なんだけど、彼、普通じゃないね」

「何がだろう。見た目がだろうか。」

「茂君。この学校には慣れた？」

「俺が転校してきたって知ってるんですか？」

「まあね。登校する生徒の顔は把握してるし……その様子だとあんまり友人に恵まれてなかったりする？」

やはり、屋上で一人こんなところで弁当を食べている自分は端から見れば孤独な少年にか見えないだろう。事実そうだ。

「大丈夫。仲間はまだまだたくさんいるよ」

励ましてくれているんだろうか。別にいいのに。だがどこ信じられる気持ちになれる。不思議な気分だ。希望のようなものが芽生えてくる。

「ありがとうございます。もう時間だし、そろそろいかないと」

「明日もきてよ。一緒に話したいし」

女子にこんなことをいつてもらえたのははじめての経験だった。

その日の午後はずっとぼんやりと薫という生徒のことだけ考えていた。隣にいる奈央のことにも気にならなかった。話しかけてうざいと思われるような女子はいないと思ったほうがいいし、実際に茂は奈央のことが気にならなくなった。

明日も屋上で薫さんとランチを取りたいなと茂は夢想到にふけた。夢想は現実となった。

次の日、屋上に向かう。ひょっとしたら薫はいないかもしれない。孤独な自分が創った妄想かもしれないし、からかわれただけかもしれない。

だが階段を上がり屋上につくと薫は確かにそこにいて、待っていたかのように茂に手を振った。茂は嬉しかった。

「ランチを一緒にと思って」

「食事はいいよ。でも一緒にいろいろ話そう」

とはいえ、何を話そうか？ しかし話題に尽きることはなかった。薫は学校のことについて詳しく、いろいろな情報を茂に教えてくれた。茂は自分の近況を語った。それは薫には楽しいものらしく、熱心に聞き入っていた。しかし楽しい時間は短いもので、実際に昼休憩は短いものだった。

「もういくよ。最後に一つ質問があるんだけど。この学校に最近幽霊がでるらしいんだって。みんな噂してるみたい。何か知ってる？」

「幽霊ならこの学校には格好の場所だよな」
「どういうことだろう。茂は首をかしげた。」

「この学校はね、そういうものを引き寄せてしまふところなの。茂君は気をつけてね。敏感な人だから」

茂にはますますわからない。

「俺は靈感があるってこと？」

「あるよ。強い靈感が」

そういうと薫は茂の右手を両手で握った。茂は戸惑いを覚えた。

「だからね、この学校には君が必要な」

「よくわからないんですけど」

「すぐにわかるよ。君は普通とは違う」

薫の顔はどこか同情しているようでもあり、何かを憂いているようでもあった。

「君はこれからさまざまな試練を受けると思う。その試練の一つが、そろそろ始まるんじゃないかな」

「試練……それは幽霊と関係があるの？」

薫はにっこりとして、それ以上何もいわなかった。

「またきてね」

？

次の日は大雨だった。これでは屋上にはいけないだろう。午前中に降り止んだとしても床が濡れて座れない。薰もこないだろう。

憂鬱にしていると、奈央が珍しく話しかけてきた。

「幽霊見た？」

「見ないよ」

「あんたって幽霊なんじゃないの？ あたしにしか見えない」

無視するか、反論するか。

「お前が幽霊なんじゃないの？」

「こっちはほかの人には見えるもの。あんた、誰とも喋らないじゃん。見えてないんじゃないの？ 実は自殺して校内をうろつく自縛霊かもよ」

奈央のくだらない言葉をいちいち否定することはたやすいが、そんなことをしたら向こうの思う壺なのでそれを避けた。別の方法で攻めることにした。

「奈央って俺のことが好きなの？」

「馬鹿じゃないの」

奈央の返事は驚くほど冷めていた。

鬱陶しいので教室を離れて廊下を意味もなくうろつく。すれ違う可愛い同級生の少女たちはこちらを気にもしない。全く、寂しいことだ。

ちょうど催してきたのでトイレに入った。ズボンのジッパーを下げ小さく縮まった陰茎を取り出し、小水を便器に流す。先ほどの奈央の態度が思い出される。くだらない会話だったが、妙に腹が立つ。あのアマ、と心の中で憎憎しく罵る。

手を洗ってトイレを出る。教室に戻ろうとすると茂は妙な違和に気づいた。

静かだ。廊下は、無音の静寂に包まれていた。何の気配もしない。

まるで茂一人だけがこの世界にいるような感覚になるほどに。

移動教室？ いや、全校集会かなにかだ。どの教室にも生徒の声が聞こえない。周囲を探っても、誰の姿もない。おかしい。やはり全校集会だ。みんな体育館に集まって体育座りだ。

全校集会なんて話は聞いてなかったぞ。嫌な感じだ。誰も彼もが自分の敵みたいだ。茂は一人、暗い考えに浸っていた。

なんだか本当に妙だなと思ってきた。おかしい。何がおかしいのか。再び周囲を見渡す。やはりおかしい。何がおかしい？

静かすぎるということだ。あまりにも。あまりにも静か過ぎる。

なんというか……空間が、普通ではない気がする。落ち着いた静かさとは違う、何か異質な空気が辺りを漂ってっている気がしてならない。

どうなってる？

廊下の奥に女生徒が見えた。セーラー服だから当然女生徒だ。女だとわかる程度の髪の長さ。肩まで伸びているというわけではない。女生徒が一人いたからといって不安な気分は消えなかった。女の顔は遠すぎてわからない。しかしこちらに近づいてくるのはわかった。

あつと茂は口をあけた。女生徒の顔はなかった。のっぺらぼうのように。女は茂に向かって歩き出した。

近づいてくる。逃げるべきだろうか。悪寒が走る。どうするか。

女はだんだんと近づいてくる。

女の何もない顔から口が出現した。口はにやりと曲がっていた。

とりあえず茂は女に背を向けて逃げ出した。教室には戻らずに一階へ。一階の前に女がいて、今度は口だけでなく鼻もあった。次は目玉かと茂は上に駆け上がる時に思った。二階に戻る。女の笑い声が聞こえる。茂にはそれが嘲笑に聞こえた。無様に逃げ惑う自分に対するあざけりの笑い。

嫌な汗が出てくる。頭が冷静でいられない。どうするどうするどうする？ くそっ、何で俺がこんな目に。

屋上だ。茂は思った。屋上にいくべきだ。こんな薄暗い場所では発狂してしまう。屋上に向かう。恐怖を断ち切るように茂は走った。背後から何かが駆ける音が聞こえる。一瞬振り向く。女が両手を前に突き出しながら向かってきていた。気持ちの悪い光景だった。女には両目が出現していた。その目には混沌と狂気が混ざり合い、さらに邪悪な、言葉にできない悪意に満ちていた。

捕まったら命はないと茂は思い込んだ。あれは化け物だ。全速力で駆け、三階へ。猛スピードで階段を駆け上がる音が背後から聞こえてくる。

屋上の扉を開け、十段ほどの階段を上がる。屋上は普通だった。雨が降っていて空はどんよりしている。車の走る音が聞こえ、空には雨の中でも鳥が飛んでいる。雨が降っているだけの、平凡で日常的な風景だ。服が濡れるが茂は気がつかなかった。

振りかえる。階段下の扉の向こうで、扉の前で茂を睨みつける女生徒の姿があった。

茂は思わず悲鳴を上げてしまいそうになった。扉の前にへばりつくものは扉を開ける気配を見せない。

「正解だよ」

声が出た。まさかと茂は思った。それは薫の声だ。声のしたほうを見る。

薫がいた。

「薫さん」ほっとするが、危機はまだ去っていない。

「あいつは大丈夫。ここにはこれないから」

「薫さんだけ何でここに？　ほかの生徒たちがどこにもいないのはどういうわけなの」茂は質問を連発する。

薫は困った顔をした。

「とにかく今はあいつをなんとかしないと」

音がする。あいつがきたのだ。

薫に、化け物がぶつかっていく。

「薫さん！」

？

学校を休むということに何か意味があるだろうかとその日の終わりにベッドの上で考える。登校拒否をしたら両親が心配するだろう。それはできない。だがどうすればいいだろう。こんな超現実的な恐怖に自分が遭遇するとは考えたこともなかった。

いや、考えたこともなかったというのは嘘だ。退屈なとき、ときには幽霊に出くわすのも悪くないという考えに浸ったときがある。本当に怖いのは孤独だから。そう思ってた。しかし霊に目をつけられるというのは似たような恐怖らしい。

この奇怪で、人に救いを求めるのも難しそうな状況を打破する術はあるだろうか。何かあるはずだ。

ふと思いついた。あの非現実的な状況で屋上に向かったとき、薫に会った。そして、薫は霊と……霊を追い払った？ わからないが、自分が今こうして無事にいるのは薫のおかげだろうと思った。薫はいつたい何者なんだろう。なぜあんな場所にいたんだろう。大雨だったのに。

明日、薫に直接聞いてみよう。もしかしたら学園に詳しい薫は全てを知っているかもしれない。

「負けないぞ」茂は呟き、心の中の恐怖を追い出そうとした。今日はもう寝よう。電気を消して目を閉じる。暗闇の中で女生徒の化け物を思い出す。再び電気をつける。今日はこのままで寝よう。

次の日のホームルーム前に蓮華が話しかけてきた。

「知ってるか？ 何でも石原百合子が行方不明らしいぜ」

「誰それ」石原百合子なる人物のことを知らない茂はそう尋ねた。

「同じクラスのだよ。生徒会で会計をした。昨日学校に残って生徒会の仕事をしてたらしいけど、忽然といなくなったらしい。鞆があるのに、百合子の姿がどこにも見えないらしい」

「マジかよ」百合子という生徒のことは知らないが、顔を覚えてないということはさほど派手な容姿ではないのだろう。生徒が行方不明になるというのは大変な事件だ。行方不明というだけで大事なのに、これが痛ましい事件となったら……。

「当てはないのかよ？」

「わからない。友達も生徒会も親も教員もさっぱりだつてさ」

「ずいぶん詳しいな」

「みんなの噂を総合しただけ」

なるほど。ほかの生徒たちがいつも以上に騒々しいのはそういうことだったのか。

「百合子はさ、地味だけどいいやつなんだ。あいつに何かあったら俺、ちよつと悲しいかな……」

蓮華はしんみりした様子を見せ、茂はどう返事をしていいのかわからなかった。

「きつと大丈夫だよ。警察も必死に探してるだろうしね」

「だといいけどな。警察なんてあんまり当てにならないから」

蓮華は自分の席に戻っていく。

茂は神妙な気分だった。今日も外は雨で、暗い気持ちにますます拍車がかかった。

石原小百合という生徒は行方不明になった。それは、もしかすると昨日の現象と何か関係があるのではないか。関連付けをする理由はタイミングのよさだけだが、茂には関連があるという自信があった。それだけに余計に不安になる。恐ろしい考えばかりが頭をよぎる。

窓の外は雨。早く止んでほしい。今日は屋上にいきたい。薫さんに会いたい。会わないと。

茂の願いが叶ったのか、雨は一時限目の途中で降り止み、日本晴れとなった。天気が変わっただけで鬱屈な気持ちが少し晴れた気がした。

昼休みになるとすぐに屋上へ。そういえば奈央と一言を交わしていないなと思ったが、どうでもよかった。何であんなクソ女のことになるのか、自分でも不思議だった。顔がいいというのは、それだけで男を否が応でも惹きつけるものらしい。腹立たしいことだ。屋上にいくと薫がいた。薫さん！ 茂が駆けると、薫の隣に誰かいることに気づいた。男だった。茂は動転して声を掛けられなかった。

「あ、茂君」薫が気づいた。

男が茂を見る。それはこの前すれ違いになった不良生徒だった。

「おお、お前か」男はどことなく親しみを込めた様子で茂に声をかけた。

「ああ」茂はどういっていいかわからずにそう答えた。頭の中はなぜこいつがいるのかという思いでいっぱいだった。

「この前話した章吾君。初対面だっけ？ 彼も君と似てる人だから、仲良くしてね。友達少ない同志、いいでしょ」

「お前にいわれたくねえな」章吾といわれた金髪の男子生徒は薫をにらみつけた。そして茂を見た。「お前茂っていうのか。俺は章吾あまがさき尼崎章吾な。同じ二年なんだろ。俺はD組だから。よろしくな」

よろしくっていったいどういうことだろうか。これからいっと友達になるってことなんだろうか。茂にはさっぱりだった。しかし挨拶をされた以上、こちらもするべきだ。

「Bクラスにいる佐藤茂。転校してきて日が浅いけどよろしく」

「転校生か。お前たぶん運が悪いんだ。きつとそうだ」

一体どういうことだろうか。茂は首を捻った。

「まあいいや。よろしくな」

「転校してきたばかりで親しい人間はその薫さんくらいだから、仲良くしてくれると嬉しいよ」茂は自分でも驚くほど饒舌にしゃべっていることに驚いた。どうやら自分は思っていたより社交性が高いのかもしれない。

「じゃあ二人は友達ってことで！」

薫が二人の背中を叩いた。かなり痛かった。

「あたしちょっと向こうにいるね」

薫は向こうにいつてしまった。いきなり不良と二人きりにされて茂はどうしていいかわからない。

章吾はじろりと茂をにらみ付けた。

「お前……見たんだろ？」

「見たって、何を？」

「幽霊をだよ」

なぜこいつがそんなことを知っているんだろう。

「全部薫から聞いた」

茂は薫のほうを見ようとしたが、薫はいつの間にかいなくなっていた。

「あれ？」

「あいつはしばらく出てこないだろ」

「どういうこと……薫さんて何者なの？」

「自縛霊だよ。この屋上限定の」

？

しばらく頭の中が混沌としていた。そして、段々と今までのことに合点がいき、なるほどなと納得した。薫が霊なら、あのときの不思議な現象も受け入れることができるかもしれない。

しかしそれにしても……薫が幽霊なんて。俄かには信じられないが、おそらくそれは事実。現に今そこにいたはずの薫は影も形もない。

「屋上の幽霊つてのは薫さんのことだったんだ」

「そうだ。それを見えるほど靈感がある人間は少ない。ましてや日常会話をできるなんてのは俺や瑠香くらいだと思った。だけど、お前も相当靈感が強いみたいだな」

「薫さんはどうして自縛霊なんかに？」

章吾は首を振った。「俺も知らねえ。あんまり聞くと悪いと思ってな。でもあいつはいい霊だ。お前が会った霊みたいに邪悪じゃない。お前だって薫に守られたんだろ？」

そうだ。あのとき屋上にいき、彼女が雨の中にいた。どういうふうにかはわからないが、薫が守ってくれたと考えていいのだろう。

「俺が遭遇したあの霊。いったいどういう存在かわからない。悪霊？」

「まあ、いつてしまえば悪霊だな。それも極めて性質が悪い霊だ。

やつは最近出没し始めた。俺は気づいた。薫以外に変なやつがいるってな。一回襲われた。なんとか逃げたけどな。かなり危険だと思う。自縛霊じゃないのに、この学校から離れない。あいつがいる限り今回みたいな行方不明事件はおき続けるだろうな」

「石原百合子のことかな。あれもその霊の仕業だと？」

「だと思っ。薫もそうだと言ってるし」

いつの間にか隣に薫がいて、茂は妙に驚いた。彼女の肌はどう見ても生氣のある人間のそれだ。瑞々しい若い体。豊満な胸。たまら

ない。なぜ彼女は霊なのだろう？

「話は大体済んだ？」

「ああ。後はお前からいつてくれ。俺はちょっと用があるから教室に戻る。またな」

章吾は屋上から出て行つた。

残された茂は沈黙考し、この特異な状況を整理した。薫は霊で、章吾と自分は霊感体質で、邪悪な霊が校内にいる。

邪悪な霊は白石小百合を行方不明にした。だとしたら、これから先も行方不明者が出るということか。恐ろしい。

「薫さんは霊なの？」茂は単刀直入に聞いた。

「そうだよ」薫は微笑みを浮かべながらそう答えたが、どこか憂いがあった。

「薫さんが霊なんて、全然気づかなかった。だってどう見ても人間だもん」

「あたしは霊になつてもう十年くらい経つ。たぶん、やりかけたことがあるからここから出られないんだと思う」

「やりかけたことって？」

薫は悲しそうな顔をする。「わからない。だけどたぶん、屋上で飛び降り自殺したんだと思う」

飛び降り自殺。こんなに明るい少女が、自殺なんてするんだろうか。だけど人間はわからないものだから、そういうこともあるのかもしれない。

「薫さんが飛び降りなんてするとは思えないけどな」

「死んだときの記憶はないの。気づいたらここにいて、この屋上から出ることはできない。だから、たぶん死因は何であれ、屋上に関連しているということは間違いないと思うのね」

茂はその推理には同意だった。薫は屋上に縛られて動けないのだ。死んだ場所が屋上なのは間違いないだろう。

茂は話題を変えることにした。今、話さなくてはならない問題だ。「あの悪霊のことだけど、いったい何が目的なの？」

薫はため息をついた。何かかもが全く人間同様だ。彼女は本当に霊なのか？

「霊のあたしだって同じ霊の相手のことはさっぱりだよ。だけどね、相手の怨念がすごい強いってことはわかる。屋上にいるから外の世界の霊のことはよくわからないけど、あの霊は危険だよ。行方不明にされた彼女も、あの霊によってすでに……」

「すでに？」その先は聞きたくなかった。

「やめとくよ。少し忠告ね。見えない世界に注意して。茂君ならたぶん見えてしまうから。霊はそこに連れ込もうとしてると思う。あの霊にあつたらすぐに逃げて。ここにくるのもいいけど、必ず守つてあげれる保証はないからね。それから仲間を集めて。君と章吾君だけじゃ心もとないから。もっと見える人が必要になると思う。予想だけど、君ならたぶん同じ種類の仲間が集まると思う。あいつは、たぶん見える君や章吾君を狙うと思う。気をつけてね」

頭がくらくらする。薫の忠告は、恐ろしかった。これから先、再び昨日のようなことになるかもしれない。またあんな目にあつたら、今度こそ駄目かもしれない。

？

次の日の朝、体育館で緊急集会が開かれた。校長が生徒全員の前に立ち、白石小百合が行方不明で、依然として捜索中だと発表した。何者かが誘拐したという可能性も高く、帰宅のさいは必ず複数で帰るようにと申し出があり、可能なら親御さんに送り迎えしてもらうほうがいいとも言った。

しかし相手が霊なら、登下校の際の注意は無意味だ。事件は校内で起きてるのだから。

授業中、茂は今後の対策を考えたが、何も思いつかなかった。薫の忠告を思い出している。仲間を集え、か。章吾のほかにも霊が見える生徒がこの学園にいるのだろうか。いるとしたらその生徒をどうやって見つけ出せばいいのやら。

とりあえず章吾と話す必要があると茂は思った。章吾はDクラスだ。休憩になったら章吾の下に向かう。

休憩になるとDクラスへ向かった。どの生徒も白石小百合が行方不明になったことの話をしている。行方不明という衝撃的な事件がおきればそうなるだろう。だがそれはまだまだ続くかもしれない。

章吾はいた。席で寝ている。別の教室のクラスに入ったことがないからどこか緊張する。意を決して章吾の下に向かう。

「転校生じゃねえか！」

誰かが茂の肩を叩いた。

見知らぬ生徒が数人、ものめずらしいものでも見るかのように茂を取り囲んだ。

「どこから引越してきたんだよ」見知らぬ生徒がいやに馴れ馴れしく尋ねてくる。

「神奈川だよ」茂は素直に答えた。

「都会だ！ こっちは田舎だから退屈じゃねえか？」

「そんなことないよ」

「そう？ 俺は古谷正樹。よろしく」

「よろしく」

からかわれたのかと思ったが、友好的なようだった。飄々とした雰囲気がある。どうも面白そうなタイプのやつそうだ。

「転校生、クールだな」数人のうちに一人が笑った。

「さすが転校生だけあるぜ」

どうもこの場にいつらい。ここは退散したほうがよさそうだ。章吾とはまた別のときにコンタクトを取ろう。茂は逃げるようにその場を去った。

待って。

声がした。普通の声じゃない。脳の中に直接響いてくるような声。すでに廊下に出ていた茂だったが、立ち止まって今いたクラスの様子を眺めた。先ほど話した連中はではない。声は女の子の声だった。

気のせいかなと歩き出すと背後から足音が聞こえた。振り返ると長い黒髪の女生徒が立っていた。

「あなた、章吾君に用があつたんでしょ？」

「何でわかつたの？」

「あたしはね、そういうことがわかる子なの。他人の心を読めるの。ほんの少しだけね」

廊下には他の生徒たちもいて、賑やかだった。茂は真剣な顔で話す彼女にどう対応すればいいのかわからない。

「俺の心を読んだ？ テレパシーでも使えるの？」

「冗談でいったんだろうけど、実はそうなの。あたしはテレパシーが使える。それに靈感もある。薫のことももちろん知ってるし、省吾とはそっちの方面の仲間でもあるの」

「へえ」

「君、幽霊に襲われたんでしょ？」

「詳しいね」

「化け物だよ、あの連中は。この世界はね、闇の部分が多いから。」

幽霊だけじゃない。化け物の宝庫なんだから。特にこの金須野っていう町はそうなの」

「そうなんだ」

「あたしは味方だよ、佐藤茂君。省吾と同じように頼っていいよ。あたしは芳賀瑠香。よろしくね」

握手を求めてきたので茂はそれに応じた。

背後に男子生徒が現れた。先ほど話しかけてきた男子連中の一人だ。名前を名乗ったな。古谷正樹といったっけ。

「芳賀、何してるんだよ。転校生をいじめんなよ」

「あたしは転校生と親睦を深めてるの。部外者はあっちへ行ってよ」「はいはい」

古谷は教室に戻っていった。

「あいつには気をつけて」

「え？」

「あいつの心の中を見ることができないの。もしかしたら、普通の人間じゃないかもしれない」

「そうなの」なんだかついていけない。

「じゃあまた。昼休みにでも会おうよ、屋上でね」

彼女は教室に戻っていく。茂は今の流れについていけず、教室に戻って頭を落ち着けることにした。

？

昼休憩に屋上に赴くと先ほどの女生徒芳賀瑠香と章吾がいた。薫もいる。

「こんにちは」芳賀が気さくに挨拶をしてきた。
「どうも」

「今ちようど話しあつてたんだよ。茂君」薫が言う。
「何をですか？」

「俺たちで悪霊退治する方法だよ」と章吾。

霊か。悪霊なんて存在しないと思つていた。今までは。
だけどこの人達はそれが存在するということを理解していて、そしてそれを退治しようとしている。ゴーストハンターか。

「面白そうだ」

「よく言つた」

章吾が立ち上がつて茂の肩を叩いた。強い力で、貧弱な茂は少しよろけた。

「お前、肉食つたほうがいいぞ。霊より軽いぞ」

霊に体重なんてあるのだろうかと思つた。

「それで、どうやって霊を退治するのさ？」

「あたしたちは霊に対して干渉できる力を持っているだろ」瑠香が言う。

「そうなの？」

「そうだよ。それを使って、あいつをやっつけるんだ」

「俺たちは今まで霊を自力で退治してきたんだからな」

「俺はそんな力ないよ」

「知らないだけだ。教えてやるよ。低級霊を退治するやり方をさ」
霊の戦い方？ 茂は首をかしげた。

放課後。秋の空の下、茂たちは金須野ではもっと人通りの多い繁

華街を歩いていた。それからそこを超え、人通りの少ない寂れた場所についた。

ここで何をするというのだろうと茂は半ば緊張して二人の挙動を見守った。場所は人気がないとはいえ、民家が密集しているような場所だ。ここで本当に幽霊退治のようなことをするのだろうか。それは一体どうやって。

「いるか？」

「わからない。あ、ちょっと反応があるね。薄いけど、その角にいる」

瑠香と章吾が道路の右へ曲がったので茂がついていくと、その先にうつすらとした存在がいた。

たまに見るものの一つ。ぼんやりとした影。

「すっごい低級だ。実体を伴わない」章吾が言う。

「影の状態だもの。これからどう転ぶかわからない。とにかく茂君、これが見えるでしょ？」

瑠香がぼんやりした影を指さすので茂はうなずいた。

「たまに見てるんでしょ？ 不思議だ。よく今まで実害がなく生きていたね。運がよかったのかな」

「いやあ、鈍感力って大事だよな。意識しないと向こうも簡単には手出ししないだろうし。憑かれるっていう経験がないんだろうな。」

そういう人間はよくいるし」

「で、あれをどうするっていうの？」

「消すんだ。念を込めて。やってみるよ」

茂は章吾に押されて低級霊と言われた影のようなものに近付いた。ぼんやりとした影は一般人には見えないもので、その場に止まっているようで実はゆっくりゆっくりと移動している。茂にはわかる。向こうはこちらに気づいている。これが本当に意志を持った存在なのか茂にはわからないが、直感で、これが自分に敵意を持っていると感じた。

「どうすればいいの！」茂は後退する。

「念じるんだ！ そいつに強い気を送れ。相手を消すような気持ちだ」

章吾はそう言うが、茂にはよくわからない。

「まずそいつの中に腕をつっこんで。そして、相手から伝わる負の感覚に打ち勝とうとするの」

茂はよくわからないまま、影の中に腕を入れてみた。

軽い不快感。これが負の感覚という奴だろうか。嫌な感じだ。なんだか気分が滅入ってくる。だが軽いものだ。例えるなら授業中に教師に怒鳴られて落ち込んだときのような。こんなものなら、耐えることはできる。いや、耐えてどうするのだろうか。そうだ。この不快感を取り除こうとすればいいんだ。やり方はよくわからないが、気合いだ。茂は目を閉じて、なるべくいいことを考えて、そして霊なんて消えちまえという思いを強めてみた。

「影が揺らいでいる。いいぞ、その調子だ」

背後から章吾の声。効いているのだろうか。もっと強く念じればいいのだろうか。茂は陽の感覚を強めようと努力し、さらに激しく相手を消し去ろうという気持ち強く込めた。

何かがぶつりと切れるような音がしたと思うと、一瞬、蒸発するような音と共に小さな悲鳴が聞こえた。虫の悲鳴のような小さなものだったが、茂は目を開けた。陽炎はすでになくなっていた。

「やつつけたの？」

「そうだ。お前が倒した。やっぱり素質あるよ、こいつ。低級とはいえ、やつつけた」

「あんなの見える人なら誰でもできるって。あたし達は数少ない見える人。いつてしまえばエリートなんだから」

「エリート？ 変人の間違いじゃねえの？」

「あんたもね」

「俺たちが、だ。こんなことしてる俺たちは端から見ればただの変人だ」

「見た目の割に客観的なことが言えるんだ。でもいいじゃん。周り

の連中なんて、自分が魑魅の類に狙われてることも、憑かれてることも知らないんだから」

「だからよお、俺たちが守ってやればいいんじゃない？」

ひんやりとした秋の風が流れた。

茂は自分の手を見た。普通だ。特に異常はなさそうだ。

幽霊を退治したようだが、ずいぶんとあつさりとしたものだ。実感が無い。だけど、やったのだ。誇っていいのだろうか。普通とは違うことをしたのだ。見えるだけじゃない。茂は心の中に強い高揚感が募るのを感じた。見えるだけじゃない。これまでとは違うことをしたのだ。

「守るか……。いいね。エリートは凡人を守らないと」

「そうだろ」

「章吾って不良のくせに面白いね」

「馬鹿、俺は不良じゃねえよ。見た目で判断するなよな」

瑠香が笑う中、茂は自分自身に感動していた。

？

「というわけで、後は訓練だ。心を強くしろ。敵のマイナスの気に当てられて弱気になるな。逆にこっちの強い気をぶちこんでやればいい。影の弱い強いは見た目で判断しろ。実体化してる影は手強いし、お前ならたぶん逆に取り憑かれる。後が大変だから徐々にコツを掴んでからにしろよ。やばそうだと感じたらすぐ逃げる。低級なら動きも遅いから取り憑かれない限り逃げれるはずだ。じゃあな。気をつけろよ。なんかあつたら電話しろ」

章吾と瑠香から携帯電話の番号を教わり、三人とはそこで別れた。「あいつ早速霊退治するぜ」章吾は茂に聞こえないように瑠香に言ったようだが茂には聞こえていた。

茂はその通り、早速別の低級霊を探すことにした。ここの場所はいいのかもしれないが、あまり知らない場所だ。あんな存在が勝手知ったるこの町に無数も存在するなんて。茂は信じられない思いだった。意識しないと、見方を変えないと、見られないものというのがあるのかもしれない。

茂は場所を変えることにした。なるべく家に近い方がいいな。

電車で家の近くまで向かい、近所の公園周辺をうろつく。不審者だと思われなければいいが。

白い人影のような存在が揺らめいている。茂はラッキーだと思った。こうも早く探していたものに会えるとは。早速茂は影に近付いた。人影は本当に人の形をしていて、シルエットのようだ。茂は近づくにつれ恐ろしくなった。実体化するほど霊は強力だという。これはまだ影のようだが、先ほど影よりも危険な感じがする。

茂は躊躇する。逡巡した後、とりあえず先送りすることにした。これだけあつさり見つかったのなら他にも影はいるはずだ。それらを探してみよう。

結局、二匹の収穫があった。どちらもおぼろげな影で、簡単に消し去ることができた。三匹目を狙おうと歩いていたら気分が悪くなったのですねに帰宅し、風呂に入り食事をとると早々に寝た。起きると気分はすっかりよくなっていた。

教室につくとクラスメイトが相変わらず賑わっている。そんな喧噪もあまり気にならない。茂の気分はよかった。

席につく。隣の奈央は携帯電話をいじっている。

「おはよう」

茂の挨拶は届いたのだろうか。返事はなかった。

ため息をつく。まあいい。いつものことだ。

ちらりとこちらを見た気がした。気のせいだろうか。どちらにせよ会話にはならないだろう。茂は奈央と話がしたかった。彼女のことが好きになっていた。愛くるしい瞳を見ながら会話をするだけで心が安らぎ、幸せな気分になると共に彼女の唇に唇を重ねたいという気持ちが湧いてくる。

もしかしたらそういった下心がわかったから、警戒されたのかも。しれない。だとしたらすごく恥ずかしい。

茂は顔に自信がない。いかにも普通という顔なので、自分が女にもてるとは思っていないが、しかし、それにしても隣の女子は自分を嫌いすぎだと思う。

まあいいや。所詮女は顔がいい男が好きなんだろ。幽霊だけど、薫のほうですつと自分を親しんでくれる。生身でないのが残念だ。本当に残念だ。あんな素晴らしい顔と体をしているのに。

本当に幽霊なんだろうか？ なんとなく、まだ幽霊であるということ。ことを認めたくないという気持ちが茂の中にはあった。

チャイムとほぼ同時に教師がきた。ホームルームを終わらせると入れ違いに一時限目の授業である世界史の教師がきた。

昼までは孤独だ。

？

昼休憩に屋上へいくと章吾と瑠香がいた。薫もいたが、彼女は手すりの上に立っていて、茂はもう少して声を上げそうになった。とっさに彼女が霊だということを思い出した。

「くると思った」薫が言った。

「ここしか居場所がないんでね」

そんなところにいたら下を通る人間にパンツが見えるのではないかと思っただが、一般人には見えないのだから問題なのだろう。茂は思う。服も霊体の一部なのだろうか。霊体というのは体以外にも含まれるのだろうか。くだらない疑問かもしれない。しかし不思議だ。弁当を広げ、食事を始める。

「昨日あれから他の霊もやつつけたのか？」章吾の質問だ。

「うん。二匹退治したら気分悪くなったからやめたけど」

「あいつらの負の力に当てられたんだよ」

瑠香が言う。彼女は食堂で買ったパンとサラダだけだ。少し寂しいが、何かわけてやるべきだろうか。

ところでこの瑠香という女生徒は前も思っただが、それなりに可愛い。ちよっとお姉さんの雰囲気だが、魅力的な顔立ちをしている。ちよっとヤンキー風だが。背は高く、薫よりもありそうだ。つまり茂よりも高いということ。

「早いところ茂をそれなりの霊能力者にしないといけないよな」

「そうだね。今日も訓練だね」

「俺は構わないよ」

「勿論だ。お前が早いところ育たないと学校の生徒はまた減るかもしれないからな」

章吾の目は本気だった。おそらく、嘘ではない。石原百合子は行方不明になった。茂が遭遇した霊が原因なら……あの化け物がまだ学校をうろついているのなら、次の犠牲者が出てもおかしくない。

「行方不明になった女子は生きてるのかな」茂が疑問をぼそりという、場の空気に冷たいものが走った。

「それは答えられないな」

やがて、章吾が言った。

「希望を持つのは悪くないよ」瑠香は言うが、その顔は決して希望を持っている者の顔ではない。

彼らは霊のことを自分よりよく知っていると茂は思う。行方不明になった白石百合子がどうなっているのか、薄々察しているのかもしれない。

「どうすればあの霊を退治できる？」

「お前次第」章吾が答えた。

霊退治の二日目。場所は昨日と同じ、陰鬱な住宅地。枯れ木に鴉が止まっているような場所だ。見るからに霊がいそうではある。

歩き回ることもなくぼんやりとした白い影が現れた。発光しているその存在はワンピースを着ている長い髪の女に見える。

「あれは恨みが強そうだ」茂が言った。

「恨み？ 違うな。恨みなんて霊には関係ない。あいつらは人に取り憑き、その人間の性質を真似ていく。恨みなんて関係ない」

「でも、生前に強い恨みを持った人が死んで……」

「そんな話は眉唾だ。今までの霊に対する考えは捨てる。俺たちのいう霊っていうのは、唐突に発生し、人に取り憑いて段々と力を増していき、しまいには面倒な存在になるっていう厄介なもののことだ。姿形も様々。全て取り憑いた者に影響するんだ」

「それじゃ、俺たちの目の前にいるあれは……？」

「取り憑いていた人間によって構築された姿だ。別にあいつが生前ワンピースを着ていた女の霊ってわけじゃない」

この男、霊媒師達を完全否定しやがった。茂は驚いた。章吾という男はよく知っている。見た目はただの不良なのに。喋り方も全然不良臭くない。もっと阿呆っぽくていいのに。悔しい。こいつ、自

分より頭がいいのではないだろうか。

ところで目の前の存在はゆっくりとこちらに移動してきているので、茂は近付いてくるにつれて緊張していた。見たところ昨日相手したような霊とは違う。もっとずっと手強そうだ。顔の輪郭が見える。はつきりとはしないが、目鼻口があるのがわかる。

こちらに近付いてくるのはどうしてだろう。俺に取り憑こうというのだろうか。そうであろう。彼らはそれしかない。取り憑かれるとどうなるのだろうか。やはり段々とやつれていくのだろうか。寄生虫のような奴らだ。

意を決し、茂は近付いてきた霊に右手を突っ込んだ。見た目は昨日の霊よりはつきりしているが手に何かが触れたという感覚はなかった。

嫌な感覚が右手を通りして全身に伝わってくる。負のオーラというやつなのだろう。これを長時間続けていたら、吐いて倒れてしまいそうだ。

相手を霧散させるような強力な気を送り込むようなイメージ。昨日のでかいぶ感覚が掴んできている。だがそれを送り込んでいるときに、茂の体は限界を感じた。茂は右手を引っ込め、後退した。

「判断はいいね。そういうの大事よ」瑠香が言った。

「けどこんなの到手こずるようじゃまだまだだ。ちょっとどいてる」

章吾が茂を押し分け、霊に対して手を出した。そして章吾が「消えろ」と言うと、霊は奇妙な悲鳴を一瞬だけ上げ、霧散した。

「消えた」茂は呆然と呟いた。

章吾が振り返る。

「スマートだろ？」

「章吾がやったのを説明するとね、章吾は言葉を使うとより自分の力が高められるの。暗示的なものかな。あたしはわからないけど。変だよな」

「お前のテレパシーのほうがずっと普通じゃないけどな。まあ、今

のは一例だ。俺はお前よりも霊をずっと退治してるから、あの程度ではちよつと気を送り込めば余裕なんだ。お前はまだまだもう少し弱い奴で練習かな」

なんだろう。霊ってこういう訓練に使われるような存在なのかな。茂は少し霊に同情する。

しかし悔しい。というよりもずるい。茂は不満を感じた。

「なんだよ、二人ともずっと前から霊退治とかしてたんだろ？俺が今のに敵わなくても仕方ないじゃん。経験少ないんだから」

「そうだな。気にすんな。別の弱いの探そう」

釈然としない。こんなにも差があるなんて。何故彼らは霊を退治してきた過去なんてもっているのだろうか。普通は能力があってもそんな機会は訪れないはずなのに。今度聞いてみようか。

二匹目もすぐに現れた。薄い亡霊めいた存在だが、これは霊であつて、一般で言われてるような霊という存在ではない。というよりも、誤解された解釈をなされた者だ。

だが実害はあるので、退治する必要は、あるのだ。

霊を破滅させる力をもつこの右手……普段は普通の手だが、ひとたび力を込めれば、自らをも滅ぼしかねない諸刃の刃と化す……。そんな想像をしつつ、茂は霊に近付き、その右手を霊の内部に直接入れた。

激しい不快感に茂は思わず手を引つ込める。

影のような霊は、茂に恐怖を与えた。目を見せたのだ。二つの憎々しい目を見て、茂は思わず後ずさった。

章吾の背中が茂の視界をふさぎ、霊を見えなくした。

「まだ危ない相手だろ」

だが茂は苛立っていた。霊にも、章吾にも、自分にも。怒りにより茂は恐怖を払拭した。

茂は章吾を退かせた。

「おい」

「下がっててくれ。俺の獲物だぞ」

茂は再び霊に手を突っ込んだ。強烈な不快感に吐き気がこみ上げてくる。

嫌な気分になる。だがこれは精神的なものだ。肉体的なものではない。そもも思うが、耐え難いものだった。

橘奈央の顔が出てくる。まるで死ねばいいのという顔で、彼女は茂を見る。それが茂にはたまらなく悲しくさせる。

だが、そんなことはいつものことだ。これからだ。これから彼女と親しくなってみせる。可愛いと思えた女だ。いずれ恍惚の表情を浮かべさせてみせる。俺色に染めてやるぜ。くそつと茂は欲情を抑える。むらむらしてきた。

そんなことを思っているのが結果的にマイナスをプラスに変えたのかもしれない。霊は破裂し、霧散した。

「おお」章吾が背後で拍手している。

「駄目かと思つたよ」瑠香も拍手する。

茂は振り返り、親指を立てて見せたが、体がふらつき、態勢が崩れた。章吾が茂を支える。

「ちよつと負荷がかかったみたいだな……まだお前には早い相手だったよ」

「でも俺、レベルアップしたろ？」

「死んだら何にもならないからね」瑠香が優しく茂の髪を撫でた。少し強気な印象のある彼女だったが、茂はその印象を変えた。実に女性らしい穏やかで聖母のように優しい表情だ。一日や二日でその人のことなんてわかるわけがない。彼女も色々な面を持っているのだろう。

「今日はこれまでにしよう」章吾が言った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5009y/>

学園レイ

2011年11月23日20時46分発行